名古屋市役所本庁舎

愛知県名古屋市

威風堂々。そんな4文字が浮かぶ。1933年の竣工で、当時の流行だった帝冠様式の外観は、規模の巨大さも手伝ってまさに威厳を保ち堂々としている。今も全館が「現役」の名古屋市役所本庁舎である。内部の金剛不壊と言えるつくりもほぼ変わっておらず、頻繁に行き交う市職員を見ながら、使われ続けた90年の時の流れを思う。

設計者は、大阪府庁舎も手掛けた平林金吾。帝国ホテルを設計した建築家、高橋貞太郎と宮内省などで行動をともにした。正面にそびえ立つ53.5mの近代的な時計塔は、塔頂に2層の瓦屋根が載せられ和洋折衷の帝冠様式を象徴する。更にその屋根の上に四方にらみの鯱（しゃち）を設置し、名古屋城との調和も図っている。鉄骨鉄筋コンクリート造で地下1階地上5階建て、塔屋1層、延床面積24,404㎡（竣工当時）の規模を持つ。外壁にはタイルや石板が独創的な意匠として駆使されている。

正面玄関を入ると目の前に重厚で華麗な大階段が現れ、1段、2段と上がって行くと、高さ約20mの吹き抜けを持つ中央広間の空間に包まれる。階段の親柱と手すりには山口県産の良質な大理石「小桜」が使われている。国会議事堂の余材という貴重なものだ。親柱には陶芸家、小森忍デザインによる美しいグリーンの照明が灯る。階段は踊り場から直進、そして美しいシンメトリーで左右へと3方向に分かれる。直進した2階には、小森の意匠による濃紺と金色の陶製タイルで装飾された中央廊下が議場まで続く。北側の廊下は全長が100mもある珍しい空間のため、玄関ホールや階段などとともに多くの映画やドラマのロケに使われている。

2階中央廊下の小森忍デザインによる柱と壁一面のタイルは、濃紺と金のコントラストがとても鮮やかだ。陽光が差し込む窓ガラスは、昭和初期のものが数多く残る。ガラスの表面は波打ち、ゆらぎを生んで、見える景色のゆがみが時代をタイムスリップさせる。2014年には隣接する愛知県庁本庁舎とともに、「意匠的に優秀なもの」などとして国の重要文化財に指定された。

撮影：山田新治郎（表紙、並びに当ページ）